

関西圏地盤情報データベース研究利用報告書

研究課題	上町台地構成層の地質構造評価		
研究者	大阪市立大学 大学院理学研究科 三田村宗樹		
研究期間	2019年 4月 ~ 2020年 4月	報告日	2020年 4月 6日
<p>研究目的：</p> <p>上町台地はその西方に南北に走る上町断層の隆起ブロックとして中位段丘層に覆われる南北に延びる台地として位置づけられている。断層のない段丘面が平坦に広がる安定な隆起ブロックとは言えず、方向性のある谷地形も確認される。部分的に地質断面図は描かれるものの、その位置は限られ、平面的な地層分布や断層などの不連続構造はほとんど把握されておらず、詳細な地質構造評価は明らかになっていない。本研究では、地盤データベースを用いて、上町台地とその周辺で標高毎の水平断面を作成し、地層分布や地質構造把握を再検討する。</p> <p>研究内容と成果：</p> <p>本研究では上町台地北部地域（大阪城地域から天王寺地域まで）を対象として、関西圏地盤情報データベースを用いて主要断面図をまず作成し、上町台地上で実施された層序ボーリングである OD-9、大手前、夕日丘地点の地質柱状図を基本として、周辺ボーリングデータにおける海成粘土層層準の確定と断面図上での海成粘土層の追跡を行ったあと、標高 10m~-15m レベルで 5m 間での各標高レベルで存在するボーリングデータの岩相地点図を作成し、基準となる地質断面との層序対比を行い、6枚の各標高レベルでの地質平面図を作成した。</p> <p>その結果、上町台地北部の標高 10m 付近から標高-15m には、Ma5 層層準から Ma10/9 層準の地層が主に分布し、難波宮・大阪城地区には Ma12 層が分布する。難波宮から松屋町付近までのゾーンを境にその南東側では地質構造は安定しており、南東に 1~2° の傾斜で緩傾斜する。標高-10m レベルでは、難波宮から松屋町付近までのゾーンで Ma7 層準相当が森ノ宮~天王寺公園にかけては Ma8 層準相当が、桃谷から阿倍野筋あたりまでには Ma10/9 層準の地層が連続的に分布する。一方、難波宮から松屋町付近までのゾーンの北西側は、大阪層群相当層を切る断層が複数認められ、それらの断層に囲まれて上下に変位したブロックが認められる。農人橋付近のブロックは周辺より相対的に 10~20m 沈下し、ブロック内では Ma7 層相当の粘土層が北東-南西方向の軸を持つ背斜構造を示している。上町台地西縁の崖線は、長堀通より南では、縄文海進期の浸食崖とみなされる比較的乱れのない崖線をなしているが、これより北側では、急崖が維持されず、崖線は不明確になる。この地域は、大坂城築造時の瓦用の粘土採取地でもあり、その採掘に伴う地すべりが誘発しているともされており、人為的な擾乱が生じてはいるが、地質構造の影響も台地崖線の状況の違いをもたらしているものとみられる。</p> <p>公開資料（論文等）：</p> <p>2020 年度に実施される予定の関西ジオシンポジウム、日本第四紀学会学実大会で講演予定。</p>			

※貸出期間終了後、研究利用報告書（本様式）と研究成果（論文等）を提出してください。
 ※研究利用報告書は、KG-NET の HP で公開します。